

2026年8月30日（日）主日朝礼拝説教

『仮小屋を建てるのではなく』 井上隆晶牧師

ペトロの手紙二 1章16～21節、マタイによる福音書 17章1～8節

①【真の第七の日（安息日）を用意するため】

今日はキリストの変容からお話をします。東方教会では「変容祭」といって、非常に重要なお祭りとして祝います。この変容の出来事は、ペトロの心によほど強い印象として残っていたのだと思います。彼は手紙の中で復活したキリストに出会ったことではなく、このキリストの変容のことを書いているからです。「わたしたちは巧みな作り話を聞いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、『これはわたしの愛する子。わたしの心に敵う者』というような声があって、…わたしたちは、聖なる山にイエスといったとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。」（Ⅱペトロ 1：16～18）

六日の後、イエス様はペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子だけを連れて、高い山に登られました。なぜ「六日の後」などという言葉が書かれているのでしょうか。六日の後とは第七の日、つまり安息日であって、神がすべての業を終えて休まれた日です。「第七の日に、神はご自分の仕事を完成され、」（創世記 2：2）と書かれています。天地創造はすべてこの第七の日を目指して行われました。この日は第一の日～第六の日の終着点であって、この日をもって万物は完成されます。しかし第六の日に創造された人間の中に罪と死が入り、人は死に、世界は崩壊してしまいました。罪と死があるまま安息日を守っても、真の安息を得ることができません。そこで第七の日の安息日が延期されたのです。旧約時代の第七の日は、真の安息日の雛形でしかありませんでした。そこで、神の独り子キリストがこの被造世界から死と罪を取り除き、真の「第七の日（安息日）」を用意するために来たのです。それが日曜日です。聖書にはこのように書かれています。「それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。なぜなら、神の安息に与った者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだからです。」（ヘブライ 4：9）この第七の日にキリストは山に登り、十字架こそ、この世界から罪と死を取り除くために必要なことであり、その後人間に真の安息日が用意されていることを教えるために三人の弟子を連れて山に登ったのです。ペトロを連れたのは、父の声を聞かせ、ピリポ・カイザリアでの信仰告白を確かなものとするため、ヤコブを連れたのは、彼が最初の殉教をするので死の意味を教えるため、ヨハネはキリストの神性を書かせるためです。

②【高い山に登る意味】

主が、わざわざ高い山（ヘルモン山、ダボル山）に登り、そこで姿を変えられたのには意味があります。聖書では、山に登るとは、「神に近づく」ことを意味して

おり、祈りの生活、修道生活を意味しています。平地に留まっていたロトに天使は「**山に登れ**」と命じました。詩編では「**町中には滅びがあります。**」（詩編 55：12）と書かれています。イエス様はいつも山で祈られました。だから修道院は山の上、崖の上に建てられたのです。また山の頂上とは、天と地の接点です。キリストこそ天と地が会う所、神と人が一つに結ばれる場所であることを教えているのです。「**聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません。**」（ヘブライ 12：14）という言葉があります。聖なる生活とは、祈りと礼拝の生活です。人が教会に来て祈る時、山に登るです。祈る人は神と出会い、神に似た者に変えられます。ひたすら祈りの山に登りましょう。

③【**キリストの変容＝私たちの救いの完成の姿**】

2 節に「**イエスの姿が彼らの目の前で変り、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。**」とあります。これを「**変容**」といいます。色のついた服が、光のように白くなり、顔が太陽のように輝くとは、被造物の太陽の光線によるものではありません。それは神的光であって、イエス様はご自身の本当の姿、神性の輝きを見せられたのです。モーセは神の顔を見ることはできず、その後ろ姿だけを見ました。それでも彼の顔は輝きました。今モーセを照らした光の源が現れたのです。だからこそ、ペトロはこの出来事を書いたのです。復活したキリストが太陽のように輝いたとは書かれていませんが、変容の時は輝いたからです。それだけではありません。イエス様は受け取られた人間性に神性のエネルギーを浸透させて人間性を輝かせたのです。人間性も太陽のように輝いたことに気づきましょう。これこそ私たちの救いの目標、私たちが創造された目的、私たちの完成した姿なのです。この肉が変容し、輝いたのです。神性が触れたものはすべて、肉も服も輝くのです。「**私たちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。**」（二コリント 3：18）「**神の本性にあずからせていただくようになるためです。**」（2ペトロ 1：4）

するとモーセとエリヤが現れ、イエス様と語り合っていました。（3 節）モーセは律法の象徴、エリヤは預言者の象徴です。この二人は旧約聖書全体を意味し、旧約聖書はイエス様を証ししていることを教えています。また教父たちは、モーセは死者の代表、エリヤは生きたまま天に上げられたので生者の代表であって、キリストは生きている者と死んだ者を裁く者を意味していると解釈しています。彼らは死んでおらず生きているのが分かります。なぜなら「**命の木であるイエス**」と交わり、その言葉を聞いているからです。神の言葉を聞いた者は生きます。

④【**仮小屋を建てるのではなく**】

ペトロは天国を垣間見たので感動し、口をはさんで言いました。「**主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮**

小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」(4 節)「仮小屋」の原語は「幕屋・テント」です。主はこう言われたのです。「ペトロよ、あなたは見た光景があまりにもすばらしいので、その思い出にいつまでも浸っていたいのはわかる。しかし仮小屋を建ててもやがて朽ちてしまう。私は、そのような仮小屋を建てるために来たのではない。私にとって仮小屋とは、私が受肉した肉体である。私はこの仮小屋である肉体を復活させ、輝かしい強い体、神が住まう朽ちない栄光の神殿にするために来たのだ。ゆえに、あなたは現状にとどまってはならない。十字架を負い、私に従いなさい。」すると光り輝く雲が弟子たちを覆いました。光る雲は、聖霊の充満を現しています。すると「これはわたしの愛する子、わたしの心に敵う者。これに聞け」(5 節)という父なる神の声が聞こえました。ここに父と子と聖霊の三者が共に姿を現したのです。弟子たちは非常に恐れましたが、イエス様は彼らに近づき、手を触れ「起きなさい。恐れることはない。」とおっしゃいました。

●1 年ぶりに長野の田舎に帰ると、91 歳の母がすごく老いて見えました。心臓の病気が体の機能を弱らせ、老化を早めたのです。もう以前のように外を歩けません。話しをするスピードが極端に遅くなっていました。それでも家の中でゆっくりと家事をしています。老いや病気は人間の罪によって生じたものであり、本来の神の計画にはなかったものです。老いも病も人の本来の姿ではなく、悲しいもののなのです。慣れてはいけないのだと思います。母の同級生がガンの末期で入院しており、もうあまり長くないという話が出ました。母は「もうこの歳になれば死はそんなに悲しくない」と言いますが、「来世のことは考えたことなどない」と言います。そこでキリスト教の復活について、少しの時間ですが話をしました。でもすぐに信じられないようで、「そんなこともあるかな」というような顔で聞いていました。

この世の人は死に臨んだとき、希望がありません。この世がすべてであって、この世を去るということはすべてを失うからです。でもキリスト教徒はそうではありません。この世は準備であり、来世が本番だと思っています。向こうの世界には、私たちはキリストに似た者に造り変えられ、栄光に輝く体、強い体、朽ちることも、弱ることも、老いることもない、死なない体が与えられる事を知っているからです。

今日、主は私たちに言われます。「起きなさい。恐れることはない」この世では信仰に起きなさい。死を恐れてはならない。来世でも聞くでしょう。「起きなさい。恐れることはない」この言葉で私は復活するのです。土であり灰である私が再びキリストの言葉によって肉となり、息を吹き返します。私を造った同じ指が私に触れるので、私はもっと良い者にとされるのです。目を上げてみましょう。イエスのほか誰もいないのです。この方の十字架と復活に希望をもちましょう。